

程, また, 慢性型程未熟児発生率が高くなると云える。

児の死亡については, 中毒症では同期間の全分娩の児死亡率より2倍の9.1%を示し, 早剥は75%, 双胎中毒症, 子癇はそれぞれ16%の児死亡を示した。さらに慢性型は, 急性型の2倍以上の死亡率を示した。

母体死亡は7例で, 子癇5例, 子癇前症2例である。後者の1例は腰麻死で, 他の1例は糖尿病妊婦であつた。そしてその児にも高度の臍のラ氏島の肥大增生が認められた。子癇の処置としては調査期間後半は前半期に比して帝切施行が少く, しかも母体死亡, 児死亡は少く, 薬物療法の進歩によるものであろう。分娩後の後遺症調査の結果は147例中60例(40.8%)に異常を認めた, 症状としては高血圧が最も多い。眼底検査は86例中24例(28%)に変化を認めた。血中尿素窒素は69例中6例に異常値を認めた。なお後遺症は重症中毒症経過者に多く, また慢性型中毒症経過者に多いことは当然である。

以上九大産婦人科における晩期妊娠中毒症の臨床統計の一部を報告した。

22. に対する追加

(長崎大) 久保田健二, 関 智巳

最近10カ年の私共の教室に於ける妊娠中毒症の発生頻度は, 分娩総数3912例中448例(11.5%)であり, 既応症に腎疾患のあつたもの13例(2.9%), 妊娠中毒症11例(2.5%)であつた。又徴候例にみると, 1徴候のみでは, 浮腫が75例(54.75%)で最も多く, 2徴候で最も多いのは浮腫と尿蛋白の合併が94例(56.28%)にみられた。母体死亡は6例で, うち5例が子癇によるもので, 新生児の生死別調査では, 中毒症を合併しない母体よりの児死亡率は2.86%であるのに, 中毒症の母体よりの児死亡率は9.48%で, 明らかに高く, この事は, 未熟児出生率が高い事も一因であると思われる。治療として, Diurexを用いた65例では, 73.3%に効果があつたが, 特に浮腫には95%, 最血圧には87.5%に効果ありと判定した。

23. 晩期妊娠中毒症の児の知的身体的發育

(日医大附産婦)

室岡 一, 玉野 豊, 代田治彦,
須藤董穂, 田中 聰

(日医大精神科) 小田原耕三

晩期妊娠中毒症が出生後の児の發育にまで影響を及ぼすか否かはむづかしい問題で, 今日までの報告によると

賛否交々決定し難い。私共もこの問題につき当教室で昭和27~34年の間に出生した児103例を手紙で母児共に呼び出し, 児のその後の發育を精しく調査した。母の妊娠歴は正常妊娠26例, 晩期妊娠中毒症軽症45例, 重症11例(子癇7例), 妊娠中毒症後遺症及び慢性腎炎合併21例である。

調査内容は知能テストとして田中ビネーにより I.Q. を算出した群と, 乳幼児簡易テストにより E.Q. を算出した2群を比較し, とくに推計学的検定には I.Q. から導いた偏差値が正規分布をするので, これによる検定の結果に主眼をおいた。性格調査は気質, 交友, 遊戯などの状況から外向性, 内向性及びその混合型の3群に分け, 身体發育は体重, 身長, 頭囲, 胸囲から綜合判定しその年令の標準値と比較の結果上中下の3群に分けた。

知能指数と妊娠合併, 分娩様式との関係を調べると, 妊娠中毒症軽症, 鉗子分娩, 帝王切開, 骨盤位, 微弱陣痛, 遷延分娩, 早期破水, 薬物誘導, 仮死1度は対照正常例と推計的に有意差がないが, 妊娠中毒症重症, 後遺症, 仮死2度, 2300gr以下の未熟児などの知能指数は正常例のそれに比し有意に低下している。すなわち晩期妊娠中毒症では軽症例は問題ないとしても重症例, 後遺症例では児の知能指数が有意に低いという結果を得たが, この両群に多い未熟児の知能指数も有意に低下しているから両者の相互関係を再検討する必要がある。まず生下時体重と知能指数を検討すると両者は有意の相関々係があり, 生下時体重の少ないものほど知能低下の傾向が認められる。他方妊娠中毒症重症群, 後遺症群と対照正常群の児の生下時体重を調べてみると妊娠中毒症の方が両群共有意に体重減少している。したがって中毒症のこの2群に知能低下の多いのは生下時体重の少ない児が多く含まれているためとも考えられ, 妊娠中毒症そのものの影響とは一概に云い得ない。しかも妊娠中毒症に特有な諸症状, 例えば高血圧, 蛋白尿, 浮腫, 眼底所見, 胎盤所見と児の知能指数の間に何ら有意関係も見出せないことはこの事実を一層確証するものと云えよう。

性格, 身体發育の面では妊娠中毒症軽症群に良好なものが多く, 重症群, 後遺症群に不良なものが多くあるが, これを推計的に検討してみると同じく有意差がない。また言語障害, 精神發育障害, 癲, 偏食, 夜泣き, 夜尿, おむつ代え時期, 知恵ずき時期などの遅延, 利手, 就眠状況など不良のものが後遺症群に散見した。要するに妊娠中毒症重症, 後遺症の児の知能, 身体發育は劣るものが多くあるが, これは必ずしも妊娠中

昭和37年6月20日

第3群 妊娠中毒症に関する問題

595—109

毒症そのものの影響とはいいい切れない。

23. に対する質問 (日大) 沢崎 千秋

妊娠中毒症の児の知能指数が劣っていることの理由の一つに、その児が未熟児であることがあるためという演者の御説明は、誠にさもありとう同感であります。他方妊娠中毒症も、未熟児もその母親の社会的環境に由来している場合が多い筈です。この社会的環境には、その父母の遺伝因子も相当影響している筈です。

とすると、父母の知能状態が、児に遺伝して、知能指数が劣っていることも当然あり得る筈です。

この知能的遺伝因子について、今の場合演者は如何御考えですか？

答弁 (日医大) 室岡 一

家庭の環境、父母の教育程度は甚だ大切と考えて、今回の調査でも項目を設けて調査しましたが、此度の調査範囲内では何ら有意な結果が出なかつた。しかしこれは大切な問題と考えるので、更に例数を追加して再検討を重ねる段階である。次に未熟児と妊娠中毒症の児とは全く同様な環境下にあり、これの区別は大変むずかしいと思う、脳波的に調べている段階で未だ結論は得られていない。

24. 妊娠中毒症およびその後遺症に対するスルファミン系降圧利尿剤の臨床的比較検討

(国立東二)

久保 博, 桜井 祐二, 小泉 秀夫

昭和33年9月以来妊娠中毒症に対し各種 Sulfonamide 系降圧利尿剤を利尿を目的として118例・降圧を目的として56例について使用した成績について報告する。使用薬剤及び方法: Chlorothiazide (Ct) 1日1.0gを2回分服連日, Hydrochlorothiazide (Hct) Hydroflumethiazide (Hft) 50mg~100mgを2回分服連日, Chlorthalidone は100mgを1回連日あるいは隔日。利尿については3~4日間、降圧については1週間の観察をした。降圧成績: 純型の有効率は15例中12例(80%)で、Ct 4例中4例Hyg 6例中5例、Hct 3例中2例、Hft 2例中1例。高血圧、腎炎の既往あるものでは7例中2例のみ有効、Ct 2例中1例、Hft 2例中1例有効、HctおよびHygの3例はいずれも無効。中毒症の既往あるものゝ有効はHct 3例中3例、Ct 2例中1例、Hft および Hyg の2例は無効。既往疾患のない経産婦9例では3例有効。即ち混合型と思われる症例では23例中9例39%の有効率であつた。分娩後1カ月に未だ高血圧を認められた

症例の妊娠中の降圧効果は27例中9例(33%)、Ct 8例中4例、Hyg 6例中2例、Hct 8例中2例、Hft 5例中1例であつた。この成績から薬剤を比較することは少数例かつ症例個々の病態により効果が異なるため困難と思われる。次にこの高血圧妊婦56例を投与成績から有効(27例)、無効(29例)の2群に分ち各症例を年令、分娩症、既往歴、血圧、筋症時期、TEA試験、後遺症等の関係を検索し、有効群には純型多く、無効群では血圧200mmHg以上のもの。妊娠7カ月以前から認めたもの、高年のも、TEAで下降したものが多しことをしつた。副作用・心気亢進・悪心・腹痛を少数例に認めた。胎児死亡は5例であつたが、肺水腫1、早剥1、中毒症主症3例(血圧200mmHg以上)で薬剤との関係は不明である。利尿効果: 外来浮腫患者79例に投与し浮腫消失あるいは体重減少したもの65例(82%)、Hyg連日投与群21例中17例、隔日29例中26例、Hft 13例中10例、Hct 16例中12例。入院例では浮腫乏尿の39例に投与し500cc以上増加したもの30例(77%)、Hct 4例中4例、Ct 21例中17例、Hyg 8例中6例、Hft 6例中3例。なお浮腫消失、体重減少は全例に認めた。副作用は最高利尿時に脱力感を、その他悪心・腹痛を少数例に認めたが、母児に重大な影響を認めたものはなかつた。

電解質排泄パターン、血清Na K Cl, Ht, A/G, 総蛋白、コレステロール等につき投与前後の変動を観察した。

24. に対する追加

(日赤病院) 丸山 英一, 村瀬 道雄

私達はクロロサイアサイド、ハイドロクロロサイアサイドを妊娠中毒症患者に投与し、演者と大体同様の結果が得られた。血清Cl, Na, K, Caは余り著明な変化がなかつた。尚血清総蛋白、A/G, 残余-N, 尿素N等は改善の傾向が見られた。

質問 (日大) 沢崎 千秋

(1) お使いになつた薬剤についての持続効果は如何ですか。

(2) 抗アルドステロン剤をお使いになつたことがありますか。

答弁 (国立東二) 桜井 祐二

① この薬剤に対する持続効果

利尿効果についてはChlorthalidoneは隔日投与群においても連日投与群と同様な成績を得たので、ある程度の持続効果は得られると思われる。しかし入院投与群では外来投与群に比し効果持続し再発が少い。即ちその条件と症例により効果が一樣でない様に思われます。同様